旭ヶ丘キリストの教会 ニュース



《今週の歩み》

4 /12(日)復活礼拝 /13(月) /14(火) /15(水) /16(木)10:00聖研 /17(金) /18(土)13-16子供オープ ンパウス



《祈りの課題》

- ①コロナウィルス禍収束のために
- ②礼拝に来れなかった人々のために
- ③主が教会学校の子供たちもお送り下さいますように

良書ハイライト

「イエスの顕現(復活)」

遠藤周作「キリストの誕生」(新潮社,1978)p.38-39

このイエス顕現(イエスの現れをキリスト教用語ではこう呼ぶ)は長い苦しい夜を送った弟子たちの宗教体験である。この深い宗教体験がどのようなものだったかは、我々には誰もわからない。なぜならこのような体験は言葉では決して言い表せぬことぐらいは我々も知っているからである。神秘(ミステール)なるものを人間の言語で表現できぬ。それは詩の中に神秘的なものを導入しようとした詩人が一番、熟知しているであろう。たとえば言語によって神秘を表現しようと志したアルチュール・ランボオはそのために詩作を放棄し、沈黙している。同じように弟子たちは長い苦しい夜の後、イエスを見たが、その決定的な体験は彼らとても言葉では言いつくせず言い表せなかったであろう。彼らがこの体験を具体的に語らなかったことは、イエス顕現の具体的な描写が長い間、資料のどこにもなく、現存する最初の証言であるポーロの「コリント人への手紙」もイエスが現れたというだけの描写抜きの言葉で語っていることでもわかる。 (第一コリント 15:3-8 ?)

言葉で言い表せぬ弟子たちの宗教体験を後世の福音書はエマオの旅人の話(ルカ24:13-35)、甦ったイエスとの食事(ルカ24:36-43。ヨハネ21:1-14)などで具体的に書いた。トロクメなどのような学者はこれは「後になって作られた逸話」だと言い切っている。おそらくそれは確かだろうし、私もそれに同意する。だがこの作られた逸話は逆に読めば、弟子たちがそれぞれのイエス顕現の宗教体験から何を感得したかの手掛かりになるのである。なぜならそれらの逸話も言葉では語れぬ弟子たちの体験を核として作られた筈だからである。

私はルカとヨハネの両福音書に書かれた顕現のほとんどが弟子たちとイエスが共に食事をするという点で一致していることに注目する。共に食事をするというのはイエスを精神的支柱とする教団の結びつきを象徴しているが、同時にそこには弟子たちが生涯の同伴者としてあの人を深く感得したことを示しているのだ。この同伴者イエスの意識はとりわけルカが書いた『エマオの旅人』の顕現の話にもっとも強く、にじみ出ているであろう。イエスの処刑後、うちのめされた弟子の二人が「『エルサレムより三里離れたるエマオと名づくる村に往く途中、起こりたる凡てのことを語りあいしが、イエス御自らも近づきて、彼らに伴い居たまえり」